



花田勝広

はじめに

①大首長直営工房と鍛冶専業工房の形成

②渡来技術と渡来系工人集團

まとめ

【論文要旨】

先学の研究は、武具・武器・馬具などの威信財や農工具などの生産用具の多岐に個別的な実証研究を中心になされていた。特に武具・武器・馬具は、詳細な観察をもとにした型式学的研究が精緻に進んでいる。しかし、製品の生産と流通あるいは配布等の重要な問題を実証するためには、製作地の特定などが必要となり、工房における生産組織と分業の問題は、製作場所の作業状態が不可欠となる。一方、鉄生産の実態を明らかにするため、製錬炉構造を解明が進んだものの、製鉄工房群の遺構群の検討がなされたものは少ない。したがって、製錬炉を中心とした構造や年代、技術内容が主な研究課題であった。このように、前者が古墳の副葬品研究としてなされるのに対し、後者は鉄の技術史研究が主体となって進んだ。つまり、鉄・鉄器生産と操業集団の関連を具体的に地域体の中で明らかにすること研究は少なかった。鍛冶中心に据えることで最も有利な点は、①製鉄工房と異なり集落内や近接地にあり、土器等の出土遺物が多く、操業の年代を特定しやすい。工房内で未製品を出土する場合もあり、集落内での操業の様相を捉えやすい。②工房を有する集落の継続時期・構成・出土遺物から、地域圏ごとの工人の分業等を考察が容易であり、掌握する在地勢力との関係を明らかにできる。③鍛冶具副葬・鉄滓供獻古墳などの首長領域の地域体で把握することができる。上記の3点である。つまり、鉄生産の上限が明確でない現状において、鍛冶工人と工房を有機的に理解が可能となる。そして、原料生産と製品の間に鍛冶工房を位置づけることにより、生産から流通が、一層明瞭になる。ここで用いる鍛冶工房は、精錬鍛冶と鍛錬鍛冶の工程を含むものである。特に、鍛冶工房の構造、出土遺物と操業者と考えられる鉄滓供獻古墳などを一体として捉え、古墳時代の渡来人が、倭政権内部の技術変革と支配構造に影響に画期や操業主体を総合的に検討したい。